紹　介

フランソア・ポラック著

「現代の経済構造とその展望」

――財の生産と分配の基本的構造――

西川良一

本書は François Paulhac; Structures et perspectives économiques du XXe siècle. — production et répartition des biens mécanismes élémentaires Paris. で、そのタイトルが示すごとく、「二十世紀の経済構造と、その展望」というう原書名で本稿はこの紹介である。

特に学理的に紹介する価値を十二分にもっているというものではないが、著者の基礎的な経済理論と、それを駆使応用した経済メカニズム、現実の経済社会へのメスの入れ方は一読に値することを疑わないし、また、それを通じて、新進経済学者として卅六才の著者の該博な、手堅い論理の推進力は、やがてフランス経済学者の著名人として、いわゆる公の大学（Universite）ではなく、Institut（アンスティテュ）人としての学者出身の名において名声をうる日の近いことを期待している。

(一)

さて、原書の構成は一適宜簡約して一次のごとくである。

第一章、経済の地位一欲望の進化と価値概念の相対性。

第一部――生産篇

第二章、経済の基本的要素としての人口一マルサス主義と人口膨張論者一行動力の相違と第三階級の発展。

第三章、生産の本質的要因としての労働一生産力と労働の本質的価値、

第四章、自然資源と、その限界一消費と資本の構成一投資の収獲逓減。

第五章、社会構成史上の資本と所有一企業と生産への投下資本の経済的価値。

第二部――分配篇

第六章、貨幣一銀行の役割と国家干渉一国家間の支払決済、すなわち為替一貨幣政策と経済指導。

第七章、交換機構と価格理論

第八章、自由主義的資本主義経済と計画的集産主義経済における欲望に対する生産の適応一総均衡と最大能率への追求の問題。

第九章、資本主義の発展一ケインズ理論と雇傭政策一総需要の分析、財政技術および投資計画。

そして、これらの全域にわたるまえがき（avant-propos）が冠

せられているのであるが、本書は著者が断っているように、決して完全な経済学の概論ではなく、企業の中で遊離した生産者の行動を中心に、微視的経済分析を重んずる古典的経済の考え方(l'enseignement classique)から重点と視角を変えて、市場理論を中心とした集約的分析、綜合所得の分配、社会的諸集団の活動と、その反動、発展による歴史的産物である諸制度の基本的役割の検討を目論んだものである。そして遂次、引用文献として、とくに現代フランス経済における諸家のものを、例えば、アンドレ・マルシャル(André Marchal)、ジャン・マルシャル(Jean Marchal)、フランソア・ペルー(François Perrowx)、ルネ・ロア(René Roy)、ジャック・リュエフ(Jaque Rueff)、ジャン・フウラスティエ(Jean Fourastié)等のものを使用しつつも場所によっては批判を与えている点は興味深いものがある。

先ず、第一章においては経済学の地位を自然科学と人間科学の境界において求め、経済の主体である人間の欲望を取り上げ、その進化面において、一面として食料的欲求を世界的な食料消費の発展の可能性について論じ、また、次第に流動化される欲求と次第に固定化する生産という観点において把えているのも特異である。そして、価値概念を経済財との関係において説き、価値概念の相対性、ついで価値と価格に及んでいるが、その末尾における「自由経済における需要に対する生産の適応と、その適用の条件と限界」及び「国家の干渉と価値の定義にかんする結果」はフランス経済的エスプリを持っている。

第二章においてはマルサス主義と人口膨張主義(expansionnisme démographique)の比較を中心に経済の基本的要素としての人口論を展開しており、さらに、原始的原住民社会から種々な経済的活動力をもっている近代社会にいたる人口構造の進化、すなわち地方人の移住と第三階級の発展を論じており、特に一九四五年の日本における年齢的ピラミッド型を示し、これを強い出産力を持つ若い人口型態として注目している点も我々に関心がもたせられる。

第三章においては、生産の本質的要因としての労働を人間の労働の技術的、社会的諸条件の変遷と生産能率の改善すなわち労働の専門化と分業化、合理化、機械自動化において論じ、農業労働の特殊条件におよび、労働の生産性と報酬をもって結んでいる。

第四章では、生産の基礎ともいうべき自然資源の限界が二十世紀の人口膨張と相まって、歴然とその兆候を現わしてきた為に、再認識しなければならなくなったと述べ、現今では、自然資源開発のテンポとそれによって産出された財の消費のテンポとの間にあるギャップを知ることが問題であるという。例えば、十八世紀末までは、重要な原料といえば農産物であり、エルネギー源は自然界であった。ところが、十九世紀になると鉱産採掘が盛んとなり機械工業が発展すると、その中心課題となったものは労働力であって、これまでの重農主義的理論の主張していたものから、財貨の価値はすべて労働に還元されるといった見解(労働価値説)が支配的となる。他方、今世紀に入ると、前述のごとく、自然資

源の限界が自覚されて来たから、近代経済学のごときは、自然界の力との協調の重要性を再発見してきたと述べ、生産方法についていま一度再考し、生産方法もしくは生産機構と呼んでいるものは、自然力によって生み出された富を人間によって消費するところの様式であると規定する。著者によれば、資本なるものは、生産諸要因のうち、人間の労働力以外の一切の要因であると定義し、他の箇所では、一定時期に現存する財貨のストックが資本であるともいう。嘗て、ボエームが資本とは迂回生産によって生ずるものであると述べたが、本著者もかかる見解に類似した見解を踏襲しているようである。最後に、生産に資本が投下されても、技術的進歩に限界があり、やがて資本の収穫逓減が働らくことにもなるから、養うべき人間が大となる程、耕作等は収穫密度の高いものを必要とし、さらに自然資源の濫費と生産物の不公正な社会分配を避けることが重大な関心事であると述べている。

第五章では生産に適用され、企業において現実に活動している資本の主要範疇にかんしての特質を検討し、次いで、社会構成史の流れの中での所有権の法制構造を研究している。即ち、社会の経済的組織は個人主義型態から集産主義型態へと移行していくものであって、その過程において、古代社会の土地所有権、中世及びアンシャン・レジーム期の所有権と契約なるものの関係、更に近世以降の所有権に対する制限等の事例の史的概観を行っている。この中で、自由社会では私有財産は認められ、社会主義社会では個人の所有権は全く認められないというのが大方の見解であるが、この点を、前述のように歴史的には漸次、所有権は国家権力によって制限、もしくは干渉されてきたし、現今では、所有権なるものは「社会的機構」に変質しつつあるけれども、それにも拘らず本質的には、社会史の過程において、所有権は永久不変の事実であって、ソ同盟及び共産主義諸国においてさえ、消費財又は各個人の所有財の個人的蓄積が行われているから、所詮、物に対する権利の自由なる享受は個人の経済活動にとって有効な刺戟剤であるとしている。

第六章は、貨幣金融問題を取扱っているが、この章でも理論的というよりはむしろ、歴史事象の説明がその内容のほとんどを占めている。即ち、貨幣の役割や機能を、古代における物々交換の不便宜性から生じた発生根拠から説きおこし、近代における信用制度や管理通貨の問題に至るまでの史的概観をおこない、次いで、銀行や為替の役割等にも説きおよんでいるが、先ずは、こうした問題を取扱った他の概論書に説明されている程度の域を越えるものではなく、特に紹介するような理論体系をもたない。次のインフレーション、デフレーションに対する国家干渉の歴史的叙述に際しても、同様のことが云えるだろう。

本章第五節で流通貨幣量と価格の一般水準との関係を理論的に考察した箇所を設けて説明を加えているが、これは、嘗ての貨幣数量説の一般的な叙述であって、本著者はこの理論の結論を需要供給法則の特殊な適用にすぎず、市場という限定された範囲内での瞬間的な事象を考慮したものであるというのがその解釈であ

る。勿論、フイッシャーの交換方程式の詳細な立入りは行っていないが、ただ、この理論からヴィザー、アフタリョン及びケインズらの諸理論の現代的解釈の契機があったことを附言している。最後に、ケインズの管理通貨政策について、著者はこう述べている。即ち、ケインズ政策はフイリップ・オーガストやルイ十五世の政策と変らない。何故なら、貨幣とは交換を容易にするための一手段であって、ケインズ理論を適用せんとする人達の誤謬は社会的構造、すなわち、私有財産及び通商の自由に触れることなく、単に貨幣的操作によって完全に解決されると考えているこの錯覚に対抗するために、交換を容易にするのに、適切且つ簡単な真の技術面を貨幣に回復させることが適当であるという。云うなれば、貨幣の人為的操作の排除ということであり、いわゆる貨幣の中立性の確保ということに外ならないことが主張されていると思う。

第七章では、価格の一般理論、即ち、価格の短期理論、より長期的な理論、更に長期理論を先ず供給面から、つづいて需要面から考察しているが、この箇所はごく平易である。しかして、価格と生産費の関係よりも、価格と効用の関係に寧ろ満足すべきであるという著者の見解に注目したい。けだし、筆者の理論は必ずしも限界効用学派のそれに依拠するものではないが、現状分析の経験からかかる見解が派生したのではないかと考えられる。例えば所得効果が現れてきたのはすなわち価格の自生的機構に対する古典派の主張と相入れなくなったと述べていることは古典派からの脱皮を、即ち、前掲の生産費よりも効用に力点を置く点と符合する。

次いで、長期的な価格理論では《蜘蛛の巣》効果といった期間要素を導入した理論を説明し、独占価格については、独占禁止法や独占の伸長と共に、計画経済の一般化を容易にしている価格の硬直性の一要因を構成していると述べている。

国家による価格への干渉はどうかと云えば、それは、ほぼ農産物価格に対してである。これは農産物は弾力性が小であり、その価格の騰貴は、食費が最も重要な部分を占めている最も質素な家計にとっては特に敏感に影響するし、他方、農業収益の減少は経済後退の大部分の原因ともなるから、統制経済が強化されるのは、このような農産物及び食糧品の領域であって、この部門に対して特にその価格安定化のための干渉を加える。その他、価格干渉は交換法則を弱体化しているが故に、その結果、価格の経済的機能、即ち生産の主導力としての価格の役割が衰退化している諸点等に言及している。

第八章では本章の標題に示されているように、資本主義経済と社会主義経済との生産をいかに欲求に適合させるか、更に総均衡、即ち、失業や過剰生産を生ぜしめることなく生産と消費をバランスさせて、ややもすれば計画経済や官僚統制に生じやすい経済の非能率を防いで、それをいかにして極大にさせるかといった問題を究明している。そのためには、先ず、資本主義の背骨を形成している自由主義学説、即ち、セイの販路説から筆を説きおろし、次いで自由主義経済での所得分配機構として、労働＝賃金、土地＝地代、資本＝利子の三要因を古典派理論に依拠して説明し、そ

して、自由主義経済の批判を倫理的な議論、すなわち自由主義経済は支払能力ある欲求のみしか考慮していない点と経済的な議論、すなわち、正統派マルクス主義者のいう、剰余価値蓄積による恐慌の永続性によるという二視点から行っている。

経済史の過程では、自由主義的な生産と消費の適合が不適格であり、従って、前に繰返へし述べた諸例からも管理主義が一般化する傾向があり、その具体例として公共的性質を帯びた電気、ガス会社や、或は一部の西欧諸国でとられた重要産業の国有化政策を挙げてその傾向を示している。

最後に、社会主義社会での正確なる個々人の効用の評価はいかにして評価されるかという点に関しては、この社会では、生産財は国有化されているが、消費財部門では、矢張り「自由領域」なるものが残されており、資本主義社会での価格に類したものによって交換が行われていることを、周知の「経済学教科書」―ソ同盟科学院刊―その他の文献を駆使して説明している。

最後の第九章では、ケインズ理論の解説、これはほとんど入門程度のものであって、理論的には余りその意義は認められないしケインズ理論の入門書としては他により有益なものがあると思われるが、ケインズ理論を誤用した場合の危険を指摘してこう述べている。ケインズ的社会主義――筆者はこう呼んでいる――では、その管理方策は交換及び価格決定機構において重大な攪乱を惹起した。なる程、社会主義的統制経済は、分配面では公平であり、人道的であり、且つ又、過剰生産や永続的失業という障害を排除したけれども、所得分配の公正化を促した美点のみに眩惑されて、価格の本来の理論構造において持つ生産の主導力という本質的機能を国家権力の介入によって失っていることを安易に看過している。換言すると、所得分配の均等化を計る余り税制が苛酷に賦課され、利潤が制限されると、企業は活動力を衰失し利子率を引下げると投資が減退することがすなわちそれである。

ケインズ的社会主義は、必需品の充足度の高水準にある豊饒な国（いうなれば資本力の豊かな国）でのみ可能であるが、しかし反面こうした経済には能率的でないこと及び停滞という重大な危険があると指適している。

自由主義経済では、価格が最も重要な一つの経済的機能をもっていたが、交換の役割としての価格の機能を減退せしめた計画経済で、生産を動かし規制する新動因として何を求めるべきか。著者の説明によると、それは会計上、財政上の調整計画とその複雑な技術であると。

二十世紀の経済構造は、一方では自由主義的資本主義がこれまでのこの構造に特有な凡ゆる桎梏や障害から脱するために管理制度をとらざるを得なくなったことと、他方、社会主義の側では、個人の所有権や個人的消費の価格機構を自由化せざるをえなくなったこれらの相隣接する両者の接触点に個人の欲求なり、あるいは効用の自働的基準を価値や行為の他の基準によって置きかえられることが重要である。そしてこの見透しにおいて、公共投資や私的投資の計画化が、市場機構がもはや自由に機能しない領域に

関連した財及び用役の相関的価格決定を同様になしうる方法で、長期経済計画の枠中の中で完成されねばならないと結んでいる。

(二)

前節において、本書の鳥瞰図を終えた訳であるが、この書の序文で原著者は、フランスにおける学校教育の過程で経済学の教育に際して、近代経済理論の内容が余りに複雑であるために学生諸君の経済学に対する関心ないしは理解が極めて稀薄なものでありそのために彼らに経済学の受験をば少なからず重荷に感じさせていることを指摘していたが、かかる重荷から彼等を解放し、更に進んで経済学に関心をもたせようとする意図をもっているのが本書である。そして、屢々繰返えすことになるが、資本理論にしろ、価格理論にしろ、その他、貨幣金融、為替に関する諸理論ケインズ理論の紹介、財政理論等々、その内容が多岐にわたっている為にやむをえない所も考えられるが、理論的には極めて、ごく初級の経済原論に叙述されている程度の説明しか行われていない。これは、経済学をこれから学ぼうとする学生のためのものであるから理の当然としなければならないところである。従って、本書に挙げられた理論は寧ろ一つの指針を提示するためのものであって、各章にわたって具体的な歴史事象を多く採り入れている。特に筆者が不動産関係の役職にたずさわっている関係から、不動産の所有権の問題や資本の分類等には入念微細にわたっている。加えて、今世紀における資本主義対社会主義の対比を、前世紀的な対決方法によっているのではなく、自由主義的資本主義が現代経済学の一つの潮流であるケインズ経済学が標傍するところの管理資本主義（自由主義者の中には修正資本主義と呼ぶものもあるが）に変容し、国家の干渉範囲が多方面にわたり、資本主義本来の経済的機構が、かかる国家干渉によって、容易に機能しなくなる。即ち、価格が全面的に硬直化するという現状と、他方、社会主義――筆者は集産主義的計画経済と呼んでいる――の側では、本来経済の計画化を厳格に実施しなければならないのに、容易にそれが遂行され難い。それはいわゆる価格機構が存在しないから、経済の機能はスムーズに働らかないし、また無駄が多い。従って、消費財の部門では、自由資本主義社会の価格機構に類似したそれを模倣して財貨の価格を決定している。しかし、これはこれ迄の資本主義社会の価格機構、即ち、需要と供給が盲目的に（at random）に出合ってそこで価格が決定されるのではなく、計画当局者が経済全般を見あわせて、需要に対する供給を計画し、価格を決定していく方法をとっている。原著者ポラック氏の言わんとされる所は、かかる計画経済においても、厳密な計画の実施を遂行しようとしても、このようにして自由主義的要素をもつ機構を援用せざるをえないことを述べようとされる訳であるが、翻って、この問題は既に一九二〇年から三〇年代にかけて、ミゼス（L. Von Mises）が社会主義社会において、いわゆる価格資本主義社会で運営されているところのものが存在しないから、経済の運行には支障をきたし、社会主義社会は成り立たないと主張したのに

対し、バローネ（E. Baxone）ランゲ（O. Lange）等が、試行醜誤（trial and error）の方法によって決して不可能ではないと批判をなしたことを思い合せるならば、殊更に耳目を新たにする程のこともないし、また、社会主義社会といえども、その遂行に有益であるような資本主義社会での残滓を場合によれば大いに利用すべきであると語ったスターリンの言葉を想起するならば、計画経済が益々厳格に統制化、計画化の方向に向う途上において自由主義的要素を採り入れるにしても勿論不都合なことではない。換言すれば、国家資本主義と国家社会主義の境界が、現在では多分に相隣接している中で、いかに個人の自由の問題を考究するべきかというのが、最後の結論となるのであるけれども、原書はこの点については必ずしも明快かつ肯首しうる解答は与えられていないように思われる。

最後に、著者フランソワ・ポラック氏の現在の身分について、若干紹介を加えておこう。同氏は一九二三年（大正十二年）二月十五日に出生。現在、フランス不動産銀行監査役（Inspecteur Principal du Crédit Foneier de France）の職にあり、加えて、ボベー農学院（Linstitut Agricole de Beauvris）及び労働科学機構附属学校（L' Ecole d' Organisation Scientifiques du Travail）の教授を兼ねている。

本書は一九五七年、パリーのリブレ・フイロソフイク・ヴラン社（Librairie Philosophiques J. Vrin, 6, Place de la Sorbonne, Paris）から公刊された。一五〇〇フラン。

本紹介は、原著の邦訳が大阪商大小林竜馬助手および同大学講師村田八郎氏と共に、一応完了した一里塚として掲載したことをおことわりしておく。

以上